

「国際社会とアフリカに繋がる：国際連盟での新渡戸稲造の外交哲学を踏まえて」

北大メディア・コミュニケーション研究院

農学研究院食水土グローバルセンター

鍋島 孝子

- 目的：今日、多様な人種と文化、価値観を認めていくにはどうしたらいいか考える。
- 解説：1. 帝国主義と植民地政策
2. 人種差別の背景
- 新渡戸の外交哲学：（専門家でないので、今回勉強して考察したこと）
 1. 欧米列強との対比と台湾の植民地化
 2. 国際政治の動向と国際連盟の限界
 3. 和平と理想の追及と愛国心の間で葛藤

1. 国民国家の構成要素

- 国民国家の成立要件：国境、国民、統治体制(王制から共和制へ) + 1ナショナリズム
- 国民国家成立の歴史的検証：内部構造

時代	価値体系	社会	国家体制	国際秩序
中世	キリスト教	王、諸侯、農奴	封建制度	ローマ教皇
国民国家	自然権	王、貴族、官僚、市民、ブルジョワ	絶対王政 市民革命	勢力均衡
近代化 資本主義	自由権「小さな政府」 生存権「大きな政府」	資本家と労働者階級 エリートとマス	共和制	帝国主義、植民地 世界大戦
冷戦	自由主義対共産主義	体制派と反体制派	自由主義体制か社会主義体制 複数政党制か権威主義体制、全体主義体制	二大超大国 核の均衡 国際連合
現代	環境、人権、経済発展	諸勢力(移民、ジェンダー、「民族」)多文化社会	民主化 多様な国家	冷戦崩壊、国連、グローバル化

2. 理性と合理性の市民、帝国主義の定義

- イギリス 16 世紀：マニファクチュア、17 世紀：無血革命
- 18 世紀：フランス革命、イギリス農業革命、囲い込み、大土地農園
- 近代化、産業革命。経済構造と社会の変化。資本家と労働者の社会階層の出現。
- 自由主義の潮流 → **新渡戸の思想的基盤**
- プロレタリアートも仲間入り：「大きな政府」、福祉国家 **新渡戸は土地制度だけは世界土地共有論**
- 社会主義によると、ルンペン・プロレタリアート=“不良”農民は入らず
- 市民とは資本主義に参加できる能力のある者。国家との関係が築ける。→選挙権・参政権付与（その後、農民を含む一般男子、女性に付与）差別の元凶
- 19 世紀、資本主義のヨーロッパ以外への拡大。近代化の土台がないアフリカ社会に遭遇

3. アフリカ農民の伝統的社會

- 伝統的共同体：血縁、氏族、年齢・長老制、職業集団(農民、鍛冶屋、祈祷師、グリオなど)、自由身分・奴隷。家族制度(父系・母系社会、一夫多妻) = 分節的社會
価値観の共有：宗教(先祖崇拜と精霊)、儀式、慣習
- 伝統的王朝は儀式的權威: ガーナ王国(8~11世紀)、マリ帝国(13~15世紀)、ソンガイ帝国(15~16世紀)
- 民族は文化を共有する集団に過ぎない。内包的民族。

4. 植民地・帝国主義：現地を資本主義に合った生産体制にする。傳統社會の破壊

1. 共同体の伝統的慣習から引き離す → プランテーションの労働力
2. 直接統治：フランス語教育とフランス革命の精神(同化政策)、市民権と「現地人」
3. 間接統治：「部族」や「民族」を「伝統的組織」だと解釈、人工的に創設

5. 独立後のアフリカ諸国の国家権力と社會

- 文化変容と社會の多層化、サブ・ナショナリズムの形成
 1. 反植民地運動の範囲と独立後の国境とは不一致
 2. 排他的・暴力的「民族」の形成。新家産国家(ネオ・パトリモニアリズム)
 3. 近代エリート(国家ブルジョワジー)と大衆農民
 4. 伝統的權威、宗教的權威
- 軍事クーデター：→ 長期的軍事政權 權威主義的国家体制 冷戦構造は温床
 - 士官：植民地教育のエリートの政治化
 - 社会主義、革命思想、ナショナリズムによる先鋭化 → 使命感。親旧宗主国派政權の転覆

6. 台湾の植民地化

- 東京・京都帝国大学にて「植民地政策学」を講義。矢内原忠雄によると曖昧で「隙だらけ」。
- 後藤新平(インフラ整備とアヘン漸禁論、治安維持)の後任で、1901~4年台湾総督府。**實質は10ヶ月の滞在。**
- 実施した政策：「農業本論」(農業と工業・商業の一体型)に基づくもの。しかし、現地小作人の調査不足。(浅田喬二「新渡戸稻造の植民論」1990年。)
 - 農村政策：新しい品種の導入。説得と同時に強制手段。農民の自主性尊重。安定財源を得た。
 - 農民組合、製糖業者の買い叩きを防ぐ。甘蔗保険。
 - 機械の導入、外国製機械の購入を政府に働きかけ。
- 現實には、日本本土の製糖会社が利益を奪取。

6. 新渡戸による植民地の理由

理由	発表者による批判と解説
1. 過剰人口を海外に移す	
2. 天災地変	現代の災害避難? 気候変動の被害? 当時の状況としては?
3. 海外への投資	實際、当時のイギリスは国内投資の焦げ付き。不満の解消。
4. 過剰生産の販売販路の拡大	モノカルチャーの根源
5. 原料の調達	不平等条約、資源や土地の所有権問題。
6. 寄港地と海外拠点	

7. ナショナリズムの拡大	サブ・ナショナリズム、民族問題
8. 文化の波及	発展・開発の画一的ベクトル。先進国から「遅れた」国へ。
9. 宗教	大航海時代と異なり、欧州のキリスト教は衰退。ミッシヨナリーは植民地統治の教育協力者に。
10. 帝國的力の行使	軍事力と経済力、技術力におけるパワーの格差。

7. 自由主義者か帝国主義者かの論争

- 日本が現地に代わって植民地政策を行う → 日本の国益
 - 国防/ 生命財産の保全/ 法律制度の普及/ 健康の保障/ 産業と交通/ 教育
 - 台湾の糖業政策は日本と台湾の運の協働だと考えていた。
- イギリス型の徐々に自治権を与える方法を理想としたが、実際の間接統治の矛盾
- 帝国主義者ではなかったが、民族主義や階級の視点が欠け、普遍的地球人の理想に向かう非現実性。
 - 前掲、1990年。前掲、谷口、p. 139 参照。

8. 国際人としての功績

- 1920年、国際連盟事務次長の一人に選出。連盟規約に人種的差別撤廃提案したが、ウィルソン米大統領やヨーロッパの反対・否決。「黒人と同じに扱われたくない。」/ 黄禍論
- オーランド諸島の帰属問題
- UNESCO(国連教育科学文化機関)の前身「知的協力国際委員会」の創設。
- 1926年、ドイツの加盟による事務部の改変で退任。
- 国際連盟には常任理事国の拒否権なし。加盟国の権限は平等。大国にとっては自国の利害を反映した決議が否決されることも。
 - 1931年の日本による満州国樹立。
 - 1933年のイタリアによるエチオピア侵略。
 - 国際連盟は対応できず、日本とイタリアは脱退を表明した。

9. 他者性の概念とフランス共和国

- 「野蛮 barbarie」：侮蔑
- 「未開 primitif」：近代的開発の初期段階。もっとも遅れている。
- 「エキゾチズム exotisme」：異国情緒。“キワモノ”、見せ物。
- 「野生 sauvage」：“森の”。
 - 自分たちとは異なる他者として認める。
 - それまでの「暗黒大陸アフリカ」を克服し、ヨーロッパ文明の外に存在する異質な文化に研究対象として向き合うことができた。
- しかしそこには、あくまでフランスの基準が存在し、他者は他者のままであった。
- 共和国の平等性や市民参加は、異文化への侮蔑の植民地と矛盾しないのか。
- フランス第三共和制下、フェリー(Jules Ferry)は教育相として、政教分離や女子教育の導入など、共和主義的で平等な市民教育を実施するが、一方で植民地推進派であった。
- それは矛盾ではなく、アフリカには「平等」を享受する資質がないと考えていたからであった。

10. 当時の国際政治の動向と新渡戸の葛藤

- 人格者、理想主義者、**人道ゆえの植民地「全地球の人化」**。領土拡張ではなく、人間活動。支配と被支配ではなく、親と子。
- **進歩主義**：植民地は文明の伝播。「遅れた」地域を先進文明が開拓の使命感/ 社会ダーウィニズムとの対比
- 「植民地とは優越なる人種が劣等なる人種の土地を奪うこと」
- 西洋優位の情勢と「全地球の人化」
- **愛国心のナショナリストの悲劇**
 - 日本の軍国主義化、言論統制。新渡戸にも情報少。
 - 満州事変後、「太平洋の架け橋」としてアメリカ遊説。日本の軍事政策の協力者として映る。

【総括：現代の価値観の土台】

- 現地理解と現地調査の重要性。中小農民を取りこぼさない。
- **協調・協働の発想**は格差の克服と、現場を知る現地住民による参加型農村開発へ
- 理想主義から新たな局面へ
 - 人道と普遍性から具体的な人権意識へ
 - 人種差別：無知の克服、差異の認識、国境を超えた人権意識
 - 文化相対論と文化変容論：文化が接触すれば、交流と反発が生じ、相互の社会構造に新たな動きをもたらす。
 - 価値観：近代的開発克服の模索（気候変動、カーボン・ニュートラル、SDGs）

【参考文献】

- 浅田喬二『日本植民地研究史論』第2章「新渡戸稲造の植民論」未来社、1990年。
- ジョルジュ・バランディエ、小関藤一郎訳『意味と力：社会動学論』法政大学出版、1995年。
- 川田順造「いま、なぜ『開発と文化』なのか」川田順造・岩井克人・鴨武彦・恒川恵市・原洋之介・山内昌之『岩波講座開発と文化1いま、なぜ「開発と文化」なのか』岩波書店1999年、pp. 1-57。
- 玉城英彦『新渡戸稲造：日本初の国際連盟職員』彩流社、2017年。
- 谷口稔『新渡戸稲造：人格論と社会観』鳥影社、2019年。